

薬局における

疾患別対応マニュアルクイズ

出題者 ファーマスタイル編集部

糖尿病 編
インスリン注射

※解答は18ページ→

『薬局における疾患別対応マニュアル～患者支援のさらなる充実に向けて～』からのクイズは活用されていますでしょうか。

今回のクイズは、本マニュアルの「糖尿病」からインスリン注射に関する出題です。マニュアルを既に読みこんでいる方は復習として、読んでいない人もまずはこのクイズでチェック！正解だけでなく、その理由も考えてみてください！

「薬局における疾患別対応マニュアル糖尿病」はコチラ



Q1 次のうち、インスリン療法に関する記述として正しいものはどれか？

- A 強化インスリン療法とは、1日1回の持効型インスリンを基本とし、必要時に追加投与を行う方法を指す
- B 混合型インスリンは、基礎インスリンとして24時間持続的に皮下投与されることが多い
- C インスリン製剤は、基礎インスリンや追加インスリンの補充を目的として、異なる作用時間の製剤を組み合わせ使用される
- D スライディングスケール方式では、過去の血糖値変動をもとにインスリン量を調節する

マニュアル該当箇所 P10-12「Q2-1 糖尿病治療薬の特徴と注意点は何か。」

Q2 次のうち、プレフィルド/キット製剤に関する記述として正しいものはどれか？

- A プレフィルド/キット製剤は、注入器が破損してもカートリッジを取り出して別の注入器に再利用できる
- B プレフィルド/キット製剤は、携帯性に優れる一方で、廃棄物が多く薬価も高い
- C プレフィルド/キット製剤は、複数の患者での共用が可能であり、医療機関ではコスト効率に優れる
- D プレフィルド/キット製剤は、保管スペースを取らないことから、在宅療養の高齢者にも推奨される

マニュアル該当箇所 P22-23「Q3-3 インスリン製剤の処方監査のポイントについて詳しく教えてほしい。」



Q3 次のうち、インスリン製剤と注入デバイスに関する記述として正しいものはどれか？

- A 複数のインスリン製剤を併用する場合は、誤投与防止の観点からも、同じ注入器を共通で使うとよい
- B カートリッジ製剤と注入デバイスの組み合わせは、メーカーが異なっても互換性があるように設計されている
- C デュラブル型注入器は、破損時には予備のカートリッジがあっても注射できない
- D プレフィルド/キット製剤は、薬液量が10mLと多く、携帯性は劣るがコストパフォーマンスに優れる

マニュアル該当箇所 P 22-23 「Q3-3 インスリン製剤の処方監査のポイントについて詳しく教えてほしい。」

Q4 次のうち、インスリン自己注射を実施している患者への服薬説明として適切なものをすべて選べ。

- A 視力障害を合併している患者には、不安やストレスに配慮したうえで対応する
- B 処方されたインスリン製剤の作用時間と生活状況との関連を踏まえて説明を行う
- C 持続皮下インスリン注入療法の患者には、SMBG (Self Monitoring of Blood Glucose; 血糖自己測定) 機器一式に加え、緊急用のペン型インスリンも携帯するよう指導する
- D インスリン療法開始時には、患者の心理的負担にも配慮し、他職種と情報を共有しながら継続支援を行う

マニュアル該当箇所 P 38-39 「Q4-8. インスリン自己注射実施患者への服薬説明について、基本となるポイントを教えてください。」

Q5 次のうち、インスリン自己注射を行っている患者への手技に関する服薬説明として正しいものはどれか。

- A 注射部位を繰り返し同じ場所にすることで吸収が安定するため、安定した血糖管理には毎回同じ部位に注射するよう勧める
- B 色覚異常を有する患者には、製剤名・製剤区分マーク・タクタイルコードなど複数の識別方法を組み合わせて活用するよう説明する
- C 懸濁インスリン製剤の混和では、使用直前に混和し、光に透かして液中の気泡がないことを確認してから投与するよう説明する
- D 注射後の入浴はインスリンの吸収速度を低下させるため、入浴前に注射するよう勧める

マニュアル該当箇所 P 40-44 「Q4-9. インスリン自己注射実施患者への具体的な手技 (操作) 説明・確認に関するポイントを教えてください。」

解答



Q1

正解 C インスリン製剤は、基礎インスリンや追加インスリンの補充を目的として、異なる作用時間の製剤を組み合わせ使用される

解説 強化インスリン療法とは、1日3回以上の頻回注射やインスリンポンプによる持続的投与などにより、基礎インスリンと追加インスリンの両方をきめ細かく補充する治療法であり、特に1型糖尿病に対し推奨されている。1日1回の持効型インスリンを用いた単純な療法は、強化療法には該当しない。混合型インスリンは、基礎インスリン分泌と追加分泌の両方を補うために設計された製剤。スライディングスケール方式では、投与直前の血糖値に応じてインスリン量を決定する。

Q2

正解 B プレフィルド/キット製剤は、携帯性に優れる一方で、廃棄物が多く薬価も高い

解説 プレフィルド/キット製剤は、カートリッジがあらかじめ組み込まれた一体型の注入デバイスであり、薬液がなくなると注入デバイスごと廃棄し、新しい製剤に切り替えて使用する。操作が簡便で、導入しやすく、携帯性にも優れているため、高齢者や注射操作に不安がある患者にも適している。一方で、注入器は使い切りのため再利用はできず、破損時にカートリッジだけを取り出して使うこともできない。また、構造上、本体が大きく冷蔵庫内での保管スペースを多く取る傾向がある。さらに、他の患者との共用は衛生管理上不適切であり、原則として個人ごとに専用とする必要がある。

Q3

正解 C デュラブル型注入器は、破損時には予備のカートリッジがあっても注射できない可能性がある

解説 デュラブル型注入器は、専用のインスリンカートリッジを組み込んで使用する再利用可能な注入器である。注入器本体が破損した場合は、カートリッジが残っていても使用できないため、予備の注入器の有無や保管方法に注意が必要となる。複数のインスリン製剤を併用している場合、それぞれに適した注入器を使用する必要があり、共通の注入器での使用は誤投与につながる可能性があるため避けなければならない。また、カートリッジ製剤と注入器の組み合わせはメーカーごとに仕様が異なり、互換性がない。誤った組み合わせでは正確な投与ができないため、処方や調剤時に十分な確認が必要である。プレフィルド/キット製剤は、薬液量は少ないが注入器一体型で携帯性に優れており、保管スペースを取る点や薬価の高さ、廃棄物量の多さなどを考慮したうえで、患者の生活環境に応じて使い分ける必要がある。

Q4

正解 A B C D (全て)

解説 インスリン自己注射患者への服薬説明では、治療効果・副作用・生活習慣・心理面・合併症への配慮など、多面的な対応が求められる。

Q5

正解 B 色覚異常を有する患者には、製剤名・製剤区分マーク・タクタイルコードなど複数の識別方法を組み合わせ活用するよう説明する

解説 同じ場所に続けて注射すると、脂肪組織の萎縮や硬結が生じることがあるため、2~3cmずつずらした注射が重要であることを説明する。懸濁インスリン製剤の混和時に確認すべきは、「ガラス面に付着した沈殿が完全になくなっていること」「液中に塊が残っていないこと」、また、混和後は「すぐに投与すること」。インスリン注射後の入浴や、運動で激しく動かす部位（上腕・大腿）への注射はインスリンの吸収が早まることで低血糖発症の可能性が高まる。そのため、入浴前の注射は避けるとともに、運動による血糖低下も考慮して注射部位に注意しているか確認する。